



全国農業大学校等プロジェクト発表会 ・意見交換会で発表、表彰

全国の農業大学校のうち、5ブロックからの代表校20校によるプロジェクト発表会及び意見発表会が、令和2年2月12日(水)から14日(金)の3日間にわたり、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されました。



[優良賞を受賞した樋口君(上)と森下君]

13日に開催された発表会には、東海近畿ブロック発表会の卒論発表会及び意見発表会でそれぞれ最優秀賞を受賞した本校の樋口翔太君(養豚・養鶏専攻2年)と森下響君(施設野菜専攻1年)の2名が発表者として、また、学生会役員3名が本校の学生代表として参加しました。

樋口君は、プロジェクト発表の部で「豚深部注入カテーテルを用いた人工受精における精液量の低減」、森下君は意見発表の部で「私の

目指す農業経営～我が家のトマトを世界へ～」と題しそれぞれ発表しました。

両名とも、東海近畿ブロックでの発表会の時よりも発表方法を工夫するとともに、練習も重ね、研究の成果や自らの考え・思いを、審査員や聴衆の学生を前に、表現力豊かに訴えました。

各5名ずつの審査員による厳正なる審査の結果、両名とも優良賞を受賞しました。

全国大会での発表はいずれもレベルが高く、プロジェクト発表では、自分たちの成果をいかに地域や産地へ普及させるか(させたか)、意見発表では、自分の夢をどこまで具体的にイメージして実現のために工夫するか(したか)が問われていました。

最終日の14日の午前中には、「私の将来と農業のあり方」をテーマにした、参加学生全員による意見交換会が開催されました。10班に分かれた分科会がそれぞれワールドカフェ方式で運営され、参加した学生同士が府県、部門を超えて打ち解けあう様子があちこちで見られました。

14日の午後には表彰式が開催され、本校の発表者2名はいずれも、精一杯頑張り使命をやり遂げた表情で表彰状を授与されていました。

4月からは、樋口君は社会人として農業振興に貢献し、森下君は2年生として自分の夢を実現させるべくプロジェクト活動を実施していきます。

今回の大会に参加して得たものが、2人の将来にとって大きな糧となることを願わずにはられません。

(農学科 野田 輝夫)



[緊張感ある発表風景]

オーストラリアへの 海外派遣研修を実施しました

本校では、海外の農業生産・流通現場において、海外の農業者と直接交流することにより、農業の国際情勢に関する見識を深めることを目的とした海外派遣研修を、2年生を対象に実施しています。

本年度は、1月25日(土)から2月1日(土)までの8日間、2年生84名がオーストラリアのホークスベリー地区を中心に、農業研修(ファームステイ)及び関連施設の視察を行いました。



[ウッドチップの散布準備]

ファームステイは、野菜・果樹・花き・畜産関係の農家に分かれ、3泊4日の日程で行いました。当初、ホストファミリー

との対面式で、学生代表の荒木亨くん(切花専攻)が英語で挨拶をする予定でしたが、高温多湿のため急遽式典が中止され、順次ホストファミリーと対面後、各ファームステイ先に向かいました。荒木くんは英語での挨拶の練習を一生懸命取り組んできたので、残念そうでした。

野菜農家での農業実習は、ナスやトウガラシの収穫、果樹農家では、ワイン用ブドウの収穫作業、花農家では、アジサイの手入れ、ヤシ類の移動作業、畜産農家では、ヤギ乳のチーズ加工品の瓶詰め、牛へのワクチン接種補助などを行いました。また、実習が終わった後は、ホストファミリーの方とバーベキューや市内の散策に出かけ交流を深めていました。

学生たちはこの4日間で、オーストラリアと日本の農業の違いや共通点を肌で感じ取りながら、実習に励んでいました。この期間中、近くで山火事の発生はありませんでしたが、ホストファミリー宅の間近まで焼け跡が迫っていました。また、水事情が

厳しい現地での生活に不便さを感じながら、農業には欠かせない水の大切さを学んだことと思います。

農業関連施設の視察では、南半球随一の規模を誇る中央卸売市場のシドニー・フレミントンマーケットを訪れました。セリは行わず、相対取引や農家が直接販売するブースがあり、学生は取引の様相や物流、保冷施設、スイカ、トマト、ナス、リンゴ、ライチなど季節を彩る青果物やバラ、キク、ユーカリの切り花などが所狭しと並べられている光景を眺めながら、現地ガイドの説明に耳を傾けていました。



[市場視察の様子]

西シドニー大学では、持続可能な農業、「ESD」及び「SDG's」の考え方に基づいた循環型農業を、炭素投入による土壌の改良を例にした説明がありました。持続可能な農業はほぼオーガニックを実践することであり、このような経営を持続するには消費者の理解を得ることが重要という講義を受けました。

シドニー市内散策では、オペラハウスやハーバーブリッジ、ロックスマーケットなどオーストラリアの街並み、歴史や文化にも触れることができました。

研修を終え、学生が提出した研修レポートには、「英語に自信がないため不安だったが、身振り手振り



[オペラハウス前で全員集合]

りでなんとか通じてうれしかった。」「海外に行くのは初めてだったけど、オーストラリアのことを知ることができて楽しかった。」など学生にとって充実した海外研修であったと感じられます。この経験が、就農や就職に生かされることを期待しています。(農学科 野村 浩二)

ヤンマー学生懸賞論文・作文の銅賞に入選

養豚・養鶏専攻 1 年生の諏訪江厘さんが、第 30 回ヤンマー学生懸賞論文・作文募集の作文の部に入選し、1 月 31 日(金)に大阪市で行われた入選発表会に出席しました。



[受賞した諏訪さん]

当日午前中は、入選順位を気にしながらも、ヤンマー本社ビルや同社リモートアシストセンターの見学会に参加し、最新のビルエネルギー供給・フリーアドレスオフィス・自社製

品 1 台 1 台の使用状況監視と生産状況管理システムなどの取組の説明を受けました。そして、午後から隣接する大阪工業大学梅田キャンパス常翔ホールに移動し、入選発表会に臨みました。

諏訪さんの作文は「家畜の幸せを求めて、、、」と題し、高校の平飼い鶏舎でいじめられていた鶏を助けた経験をきっかけにアニマルウェルフェア（動物福祉）の概念を知り、農大で経験するケージ飼いと平飼いの長所短所をふまえつつ、将来はアニマルウェルフェアを実践するだけでなく広めていくのが目標であるという内容で、審査の結果、銅賞を受賞しました。

受賞作品の審査員講評では、上位作品の評価に交じり諏訪さんの作品が取り上げられ、「家畜の幸せとは何か、どうやって飼育すればよいのか。高校の先生を困らせるくらいの視点の鋭さが評価できた。」との言葉をいただきました。また、発表会後の懇親会でも、審査員の先生方に励ましの言葉をかけていただいていたいました。

今回の懸賞論文・作文の募集には、論文の部は25校48部、作文は23校522部と多数の応募がありました。作文の13部の入選作品のうち多数を占めたのが、鹿児島県農大6部、畜産関係8部で、いずれの作品も自分の経験に基づいた意見や将来の夢を語っ

ていて、具体的な提案があるほど高く評価されていました。諏訪さんの作品は夏休



[賞状授与の様子]

中に書いたもので、そのあとに実施された派遣実習で得た経験や気づきを取り入れたら更に良かったと思われました。

また、今回は第30回の節目の開催を記念して、過去の作文・論文の受賞者5人の現在を紹介するVTRが上映されました。その1人目に、本校の卒業生である石川客胡さん（第22回金賞受賞）が、作品の中で熱く語っていたとおり、現在、誇りをもって酪農家で仕事をしている様子が紹介されました。先輩に続き、諏訪さんも家畜を幸せにする管理者・指導者になることや、今後も本校から多くの学生の夢が受賞につながることを期待します。

(農学科 渡邊 久子)

農学科一般入学二次試験を行いました

令和2年2月14日(金)に、農学科一般入学二次試験を実施しました。本年度は、養豚・養鶏専攻に限り、若干名の募集をしました。その結果、3名の応募があり、3名が受験をしました。2月26日(水)に合格発表が行われ、1名が合格しました。

一次試験同様、午前中に小論文と数学の試験を行い、午後からは、面接試験が行われました。受験者は、緊張した面持ちで試験に臨みつつも、受験勉強の成果を発揮しようと全力で取り組んでいました。

本年度は、推薦入試82名、一般入試55名の合計140名が農業大学校を受験しました。受験者の傾向を見ると県内外の農業高校から85名、普通科、商業科、工業科、総合学科など農業以外の高校から55名の受験がありました。また、現役大学生や社会人経験者など現役高校生以外の受験も多くありま

した。

受験者の中には、専業・兼業農家の子弟が26%で、特に露地野菜（キャベツ、人参）農家や施設野菜（メロン、トマト、キュウリなど）農家の子弟が多く集まりました。また、水田作、酪農、花農家など地域の基幹的な品目を担う若い人材も多く受験した一方で、非農家出身の受験生の中には、これから農大で知識や技術、経営学を学び地域の農業を活性化したいなど、農業に対する様々な思いや夢を抱いている人が大勢いたことも特徴の一つでした。

今後も、農業を学ぶ気持ちは強く、本県の農業の担う受験生が多くなることを願っています。（学務課 鈴木 聡）

指導職員向けのメンター研修を開催

本校では、平成28年3月に「教育研修基本計画2020」を策定し、農業を担う者の育成、農業者生涯教育の充実、県民の食料・農業への理解促進に係る3つの大きな目標を掲げ、その目標実現のための7つの柱と主な取組を計画的に実施しています。



[真剣に聴講する職員たち]

去る1月31日（金）に、その柱のひとつである指導職員の指導能力向上を図るため、10月に引き続き農学科職員を対象として同科の職員2名を講師に、指導力強化研修とGAP指導員基礎研修でそれぞれ学んだポイントについて情報交換するメンター研修を開催しました。

講師から学生を指導するポイントとし

て、学生のスキルや人物像を把握し、求める姿とそれを具現化するための計画を学生自身に考えさせること、人物像の把握には「エゴグラム」という手法が有効であることが紹介されました。

別の講師からGAPは食品安全、環境保全、労働安全、人権・福祉、農場運営上の事故を予防する手段・道具であり、特別なことではなく、当然実施すべきことであり、外部の人が信頼できる農家であるかを判断するための道具であるといった基本的な概念を教えてもらいました。

農学科の職員は毎日専攻実習の講義があり、一同に集う機会は限られることから、来年度も指導力強化研修とGAP指導員基礎研修にできる限り多くの職員に受講してもらうことで、伝達ではなく、直接、研修成果を各職場に活かしてもらう予定です。

（教育部長 黒田 貴信）

農大におけるCSF（豚熱）防疫にご協力いただきありがとうございます

県内の養豚場で豚熱が発生してから1年が経ちました。本校では約200頭の豚を飼養しており、校内には学生を始め多くの方が出入りするという特殊な環境の中、いかに豚熱の発生を防ぐかという難しい問題に取り組んだ1年でした。

昨年3月には豚舎の周りを柵で囲い、専攻学生以外の出入りを禁止し、豚舎内外の消毒を徹底しました。また、校舎に出入りする一般の方々にも靴底や車両の消毒をお願いしてきました。

学内外の多くの方々に御協力いただくとともに、昨年10月から本校でも、飼養する豚へのワクチン接種を開始し、現在では豚熱発生の危険性は大きく減少しました。

しかしながら、今後も油断することなく、衛生管理区域（畜産関係施設のある区域）を中心に消毒等の衛生管理を徹底していきますので、ご協力をお願いいたします。

（農学科 山本るみ子）

雇用創出農業研修 研修生27名が9か月間の研修を修了

新たに農業を始めたい社会人向けの職業訓練である雇用創出農業研修（愛知県雇用セーフティネット対策訓練農業科）の閉講式が2月3日（月）に農大で行われ、研修生27名が修了しました。研修生は延べ160日間（合計960時間）、農大ほ場における実習や講義等による訓練を受け、農業に関する基礎的な技術・知識を習得しました。

なお、閉講式に先立ち1月30日（木）には卒業発表会が開かれ、研修の成果や今後の就農への決意、経営方針等について発表しました。積極的ながらも、堅実な計画を発表する研修生も見られ、就農に対する熱意を感じる発表会となりました。



〔令和元年雇用創出農業研修修了生と関係職員〕

研修生は修了後、新規参入で就農する人、更なる技術習得のために新たな研修を受ける人など様々です。各地域の農業者の皆様の新たな仲間となりますので、今後とも御支援、御協力をよろしくお願いいたします。

（就農支援科 石本 聖絵）

「愛知農業次世代リーダー塾」が修了

愛知県農業を牽引する優れた経営感覚を備えた担い手を育成するため、9月に開講した「愛知農業次世代リーダー塾」は、2月12日（水）に経営計画の発表会及び修了式を行い、合計12回の研修が終了しました。

研修では、全国トップレベルの講師陣を迎えて経営理念・経営戦略等の講演を受けるのみならず、毎回グループワークを通し

て積極的に演習に参加するとともに、課題図書を紹介など、ハードワークが要求される内容でした。いずれの受講者とも各課題に前向きに積極的に取り組み、研修を通して着実に成長していくことが感じられました。



〔修了生、関係者で記念撮影〕

修了式当日は、これらの成果を踏まえて作成した経営計画を、パワーポイントを使って発表しました。いずれの経営計画とも経営理念を明確にイメージし、その実現のための具体的な計画を練り上げた、極めてレベルの高い発表でした。

引き続き開催された修了式では、修了生8名に対し、友松校長から一人ひとり修了証書が授与されました。

研修終了後のアンケートでは、修了生全員が大満足または満足と回答し、「今まで受講した研修よりも勉強になった。」「研修生同士で刺激になった。」「仲間ができて良かった。」等の感想が聴かれ、研修生からの評価の高いリーダー塾となりました。

研修終了後も、目標達成に向けて活躍され、近い将来、愛知県農業のリーダーとして成長されることが期待されます。

（担い手支援科 野々山利博）

ジネンジョに関する生産高度化研修を開催

2月18日（火）に愛知県じねんじょ主産地

協議会との共催で「ジネンジョの生産安定」をテーマにした研修会を岡崎市役所で開催し、県内各地から163名の生産者等の参加がありました。

研修会では、愛知県農業総合試験場の田中哲司主任研究員と中村嘉孝主任から、3年計画で実施しているジネンジョの被覆資材の地下部環境への影響や土壌中の湿害対策技術についての試験結果の発表、また最適な施肥方法について提案がありました。

続いてJA愛知東作手自然薯組合の鈴木康弘氏から、作手地区における栽培上の特徴や、品質向上に向けた組織間交流活動等への取組が紹介されました。



[多くの受講者が熱心に聴講]

最後に、愛知県農業総合試験場の加藤美雪専門員を座長に、総合質疑が行われました。活発な質疑となり、参加者のジネンジョ栽培に対する熱い思いを感じることができ、モチベーションの向上に繋がったと考えています。

また、研修後のアンケート結果においても、「今後の経営の指針にしたい」「栽培に苦労しているが、試してみたい点があった」などの回答も頂き、有意義な研修会となりました。(担い手支援科 福井 敏幸)

オーストラリア短信

海外派遣研修で訪れたニューサウスウェールズ州は、昨年9月からbushfire(山火

事)が継続的に発生していました。我々が訪れたホークスベリー市周辺では、12月頃が最も切迫した状況だったようで、ファー



[車窓から見える幹線道路沿いの炭化した樹木(左)と
実習ほ場すぐ横にある延焼した巨木(右)]

ムステイ先に向かう幹線沿いの樹林は黒く炭化し、ホスト農家ほ場のすぐ側までbushfireが迫った痕跡が見られました。多くの人々、森林や野生動物に被害が出ている現状を見て、一刻も早くbushfireが鎮火し平穏な日常が戻ることを祈らずにはいませんでした。

(副校長 堤 公生)

(※研修終了後、2月に入ってから降雨によって、ようやくbushfireは終息に向かっていると報道がされています。)

農大からのお知らせ

◇令和元年度卒業式◇

農学科の令和元年度卒業式を次のとおり開催します。

- ・期 日：令和2年3月5日(木)
午前10時30分から
- ・場 所：中央教育棟3階 大講義室
- ・問合せ先：学務科(伊藤) 0564-51-1602

◇生産物実習販売ごよみ◇

令和2年3月の生産物実習販売についてお知らせします。

- ・販売日：3月4日、11日、18日、25日
(祝日を除く毎週水曜日です。)
- ・時 間：午後3時から

- ・場 所：農業大学校体育館
※なお、袋入り堆肥の販売は、第2機械庫前で牛ふん堆肥と鶏糞堆肥を販売します。
- ・問合せ先：農学科(山本) 0564-51-1673

◇ニューファーマーズ研修受講生の募集◇

- ・対 象 者：県内で農業経営を目指す55歳未満の方。
- ・内 容：農業経営に必要な基礎的知識・技術などを約10か月間で習得します。講義・演習等を本校で概ね週1回、実習を自己ほ場または先進農家で行います。
- ・募集期間：2月18日(火)～3月19日(木)
- ・申込方法：就農予定地(未定なら居住地)を所管する農起業支援センター(各農林水産事務所農業改良普及課内)で御相談の上、御申し込みください。

※詳細は、本校ホームページを御覧ください。

- ・問合せ先：就農支援科(石本)
0564-51-1034

校内でCSF(豚熱)防疫対策実施中

農大では、CSF防疫対策を以下のとおり実施中です。来校される皆様の御理解と御協力をお願いします。

- 畜舎のある衛生管理区域への関係者以外の立入禁止
- 農大内の主要な通行ポイントに消毒用の消石灰を散布
- 主要な教育施設の各出入口付近全てに踏込消毒槽を設置(靴の消毒)
- 関係車両等の消毒の徹底
(車両消毒槽、動力噴霧器)
- その他、諸防疫対策を実施